拝啓、好きになってください。

いろはにほへと??

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もうすぐクリスマス。欲しいものは未だ遠く、願うことさえ叶わない――。

『あれ？　比企谷くん？』

寒空の宵、振り向くと彼女は立っていた。

しかし見覚えがない。会ったことあるか……？

『一応同じクラスなんだけどなあ……』

△オリヒロ×八幡△

天然な彼女――晩翠柚奈（ばんすいゆずな）

天然かどうか怪しいところもあるんだが……。けれども、彼女は彼らをかき乱して、

乱されて、そして決意する。
※アンチヘイト要素なし
！ストーリーの構成を変えたので、タイトルも変えました。混乱した方、すみません！

目　次

存外、晩翠柚奈はあっさりしている。　1
殊の外、一色いろはは打たれ弱い。　11
外套を纏い、彼は何度でも元来た道を引き返す。　20
彼女は、いつでも少し先を歩いている。　26
されど彼も彼女も、本物が欲しい。　35
誰もが、いつだって追い求めている。　43
彼女は、過去も未来も見据えている。　53
誰もがきっと、忘れた頃に思い出す。　61
だから、きっと彼女は。　65
彼女の思惑は、きっと誰も知らない。　70
彼は進み、彼女は停滞する。　78
彼も彼女も疑わしい　84

存外、晩翠柚奈はあっさりしている。

夜空が綺麗だった。

師走の冷寒はよりいっそう増して、張り詰めた空気に俺の吐息が溶けては消える。俺はまるで氷のように冷たいベンチに腰を下ろして、脱力していた。しかしこの寒さで休まるはずもなく、反対に疲労感だけは溜まっていく。頭だけは冴えていて、今すべき自分の仕事を至極客観的に捉えることだけはできた。

クリスマスイベントの発生から、俺たちの問題は極めて加速度的に増した。

例えば、雪ノ下雪乃の欲求。

あるいは、由比ヶ浜結衣の気づかい。

追従的に、一色いろはに対する責任。

そして、鶴見留美を含む過去の清算。

考えてみれば自分自身の責任なのだ。相手の思考の忖度さえしても行動はおこさない。他者は他者でしかなくて、自分は自分でしかない。畢竟、相手を慮って、知った気になって行動するようなことは絶対にしない。ある意味で、それが信条でさえあった。けれど、表面上でそうしたつもりでも、事実本質は違った。

例えば、鶴見留美。

俺は彼女の惨めさを排除することを第一に、行動を起こした。その結末として鶴見留美は周囲から孤立している。彼女は甘んじて受け入れているように振る舞うが、それがまた俺に正しさを問うのだ。自身の行動に伴う責任さえも究極に当たり前のごとく俺の胸中に踏み込んでくるのだ。

例えば、一色いろは。

彼女を嵌めたやつらに仕返しをするだとか、葉山のことだとか、彼女が生徒会長になるべきメリットを挙げ連ね、依頼を逆説的に解決した。けれど実際、これは俺のためでしかなくて、言うならばお為ごかしだったのだ。

俺がしてきたことは、依頼の、逃れることのない仕事の解決のようで、その実自分や少しの周囲の人間のためだけだったのではないか。そんな後悔の念が押し寄せて、まるで誰かにアピールでもするかのように俺は大きなため息を漏らした。

「あれ？　比企谷くん？」

不意に名前を呼ばれて、俺は大仰に振り返る。公園の入口はベンチのすぐ真後ろにあって、必然的に向かい合う形になってしまった。

立っていたのは、クラスメイトかも怪しいが、どこかで見たことのある少女だった。パーカーとウインドブレーカーのパンツで、ジョギングでもしていたかのようなラフな

格好だった。しかし特に息の切れた様子がなければ、汗をかいたようでもない。
「あーえーっと……」
言葉に詰まる。平素から他人と話すハードルが高い俺にとっては、会ったかどうかさえ定かでない人間とコミュニケーションを取るのは些か難しいのだ。というか至難の業……。
しかし、こんな子のことを忘れるだろうか。
綺麗で風に靡くショートヘア。意志の強さがそのまま宿ったような大きな瞳に、薄い桃色の唇。
客観的に見て、人目を惹くくらい美人なのだ。
「あれ覚えてない？」
「お、おう……、まあ、悪い」
手を縦にして詫びると、彼女は俺の非礼を気に止めることなく、微笑みを浮かべる。
「一応同じクラスなんだけどなあ……」
微笑みではなくて、苦笑いだったらしい。
俺もつられて苦笑いしてから、あたたかーいマッ缶を放って、一応名前も知らぬ彼女を気遣っておく。いや、正確には覚えていないんだけれど。
「偶然、さっき間違えて買っちまったんだ」

まるで言い訳みたいに、ワンクッション挟んでから飲むように促した。今の気温は十度を切っているのだ。意図せずとも風邪をひいてしまう。

「ありがとう……」

彼女は一瞬惚けてから、笑みを浮かべる。久々に見る純粋な笑みに、俺もつい笑顔を浮かべてしまった。もっとも彼女ほど綺麗なものではないし、何なら気持ち悪いまであるが。

「ところで本題に戻るが、名前は？」

「んー……甘っ……」

彼女はマッ缶をひと口だけ呷ってから、俺の質問に答える。

「私の名前……？　なんだと思う？」

「は？」

「はいだめーっ！」

「何が」

「一回で答えなかったから」

「お、おう……」

俺は当惑して、それきり黙った。

彼女はしばらく俺の答えを待ってから、タイムアップと言わんばかりに、リスト

ウォッチを見てから手を交差させて、バツマークを作った。
「はいだめーっ！」
「二回目だな……」
呆れて、口から漏らす。その反応が気に入らなかったようで、彼女は少し頬を膨らませた。
「私は、私の名前は、晩翠柚奈」
彼女――晩翠柚奈は存外あっさりと自分の名前を口にした。もっとひっぱると思っていた俺は呆気に取られて、少し反応が遅れてしまった。さらに、嫌な言葉が口から漏れる。
「ゆずっち……」
あ、やべ、と閉口するも時すでに遅し。由比ヶ浜の話を聞く――聞かされているだけだが――ことが多いから、無意識的に一致してしまった。いつもなら何度も類推を重ね、満足のいくまでトレースを繰り返すのに。疲れているようだ。
「あ！　どーもゆずっちでーす！」
「……可愛い」
「へ？」
「ああ……いや、何でもない！」

動揺を隠しきることもせず、俺はひたすら取り繕った。そも俺の中で可愛いのは小町と戸塚だけなのだ。あの二人以外に興味を、関心を向けることは失礼に違いない！　天使最高！

ちらっと晩翠を見る。彼女はちょうど街灯の下にいて頬を赤く染めて、少し俯いていた。その姿がどこか儚げで、対照的な気がするのに、雪ノ下を思い浮かべてしまった。

とにかく、相手が名乗った以上こちらも自己紹介をするのが常。俺はやる時はやる奴なのだ。

「日本は千葉。生まれも千葉。比企谷八幡です。ニックネームはヒキガエル、ヒキタニ、引立て谷、ヒッキーと色々呼ばれてきましたが、最近はヒキタニが主流かなと存じます」

ふっ、と言い切って目線を彷徨わせると、不意に目が合った。まるで悲しそうなものを見るような……。やめてっ！　これ以上黒歴史を増えさせないで！

「つーかもう八時半か」

話を逸らすために、殊更に時計を見る。

「あ、うん、そうだね」

彼女はさっきの話には触れずに、スマホをポケットから取り出して時間を確認する。

「えーっと……晩翠は何してたんだ？」
「さーんぽ！」
「お、おう……」
やったらやられる覚悟をする。しかし彼女は俺に同じ質問を返すことはなく、俺は内心ほっとした。それにしても、そろそろ帰らなくてはいけない。小町ちゃんからの怒涛の愛のメールが鳴り止まないのだ。バナーには『いつになったらソース買ってきてくれるのさ！』なんて表示されていた。これもお兄ちゃんへの愛だと思えば、小町はまだまだ兄離れできていないようだ。
「そろそろ帰った方がよくないか」
「あーうん、まあそうだね」
ぽしょりと、「今結構楽しいんだけどなー」なんて足してくる。あざとすぎて全俺が泣いた。
「じゃあ送ってくわ」
「え、なんで？！」
そんな驚くほど嫌ってことなんですか、そうですか。死のうかね……。
「あ、いやそうじゃなくてさー。不意だったからね。ほら、わかるでしょ」
「まあ分かんないことはない」

白々しいくらい適当に返事をしてから、自転車に向かう。こうなればきっと荷台に彼女を乗せるのが最も早いのだ。

自転車を公園の入口まで持って行って、彼女を乗せる。彼女の持ち物を籠に入れようとしたが大きさ的に入らず、そのまま持ってもらうことにした。やがて間もなく俺たちは公園を出発した。

「ナビ頼むわ」

「うん、そこ左折」

道と建物との境界線さえ定かでない道を、晩翠の指示通りにスイスイ進む。彼女が指示するたびに、細く、しなやかで長い指が視界に入り、同時にふわりと甘い匂いが鼻腔をくすぐった。

なんか……なんかさあ……！

「なんかカップルみたいだね」

「それ言わないようにしてたやつ」

「君って普段からまったく喋らないのかと思ってたよ」

「まあな。妹と戸塚以外には必要最低限……というか必要最低限さえ会話を交わさない」

「戸塚くん？　可愛いよねえ……」

「ああまったくだ。まずおよそ男子とは思えない綺麗な微笑みで俺の一日は始まり……」

俺が戸塚について語り始めようとしたところ、晩翠の指示で左折して間もなく、彼女の家に着いた。それで彼女の家の近さを知った。閑静な住宅街にあって、二階建ての普通の一軒家。玄関の名札には大文字で『ＢＡＮＳＵＩ』と書かれていた。それを見てから彼女の指示が事実であったことを確認した。

「ありがと、比企谷くん」

言いながら、彼女はひょいっと自転車から降りる。パンパンと服を叩いてから佇まいを直すと、ぐいっと至近距離で俺を見つめる。

「本当にありがとね、比企谷くん」

「……おう」

面映ゆさも相俟って、ぶっきらぼうに返事をしてしまった。しかし彼女は気にすることもなく、両手を後ろに組んで微笑む。

「じゃ、また明日」

「おう」

まあ、明日話すことはないんだろうけど……。なんて思いながら、それは口にしなかった。

俺らしくもなく感傷的な気分になっていたせいで、彼女に無関心に当たることができなかった。

あまつさえ、話し相手になってほしいと思っていたのだ。すぐに人に頼ろうとする。すぐに人に丸投げしようとする。昔から俺の悪い癖だ。

解決しなければいけないのは俺だというのに。

公園で突然出会って、なし崩し的にマッ缶をあげることになって、家まで送ることになって。

まさに人間万事塞翁が馬。

不思議な女の子だ。

会話を、ともすれば、会話とも取れない言葉を酌み交わしただけで、少し楽になった。

俺は一段と高くなった星空を見上げてから、自転車に跨った。そして今来た道を引き返して、反対にある自宅へ帰った。

あ、マッ缶の評価、聞き忘れた。

殊の外、一色いろはは打たれ弱い。

はあ……、と大仰にため息を吐きながら、今日も今日とて仕事に向かう。学生は仕事が本業らしいから放課後に副業をしに行くと言っても語弊はないと言えよう。したがって、必然的に更に報酬がアップするはずなのである。それなのに、アップどころかそもそも報酬がない。報酬という概念が存在しないのだ。さしあたり、俺の行動に名をつけるなら、時間外労働、タダ働き……。

疲れたよう……なんて思いながら俯いて歩いていると、更に憂鬱そうに歩く姿があった。いつも勝気に誇る様子とは対照的で、彼女――一色いろははため息を吐き出す。俺は早足で追いついて、ちらっと横顔を見てから声をかける。

「疲れてるな」

「当たり前じゃないですか……」

突然俺が来たことに驚いた素振りも見せず、まったく普段通りに会話をする。

しばらく他愛の無い会話を続けていると、不意に見知っているような顔が見えた。彼女はコミュニティセンターの前に立ったまま、ちらちら辺りをうかがっている。時々ス

マホに視線を落としては、まるで誰かと待ち合わせをしているかのように何かを確認する。しかし誰かが来る気配は毛頭ない。

「何やってんだあいつ」

「も、もしかして、お知り合いですか？」

「知り合いくらい存在するから……」

「折本先輩、とか？」

うっと言葉に詰まる。実際本当のことを伝えても、今更黒歴史が一つ増えるくらいで、過去の話が伝わることは何とも思わない。然れども、以前折本かおりは自ら口にすることを控えたのだ。今更俺が伝える理由もあるまい。

苦笑いを浮かべてそれきり閉口した。一色も連日の疲れが溜まっているのか、必要以上に口を開くことは無い。業務連絡くらい最低限のことを口にしながら、やがてコミュニティセンターの正面に着いた。眼前になった彼女は、果たして魅力的な笑顔で俺に声をかけてくる。

「遅いよ、比企谷くん」

「あーはいはい。で、何でいるの……えっと」

「晩翠！　晩翠柚奈！」

「あー、はい、覚えた。晩翠な」

俺は彼女の名をやっと覚えたところで、隣の訝しむような視線に気がついた。誤解のないようジェスチャーを使いながら、明々白々に説明する。

「クラスメイト」

「いやいや……じゃあ何でここにいるんです」

一色は先の訝しむような視線を、今度は晩翠に送る。晩翠は特に気にすることなく、視線を払い除けて、ずかずかと距離感無視で詰める。

「君がいろはちゃん？」

「あ、え、はい……」

殊の外、一色いろはは打たれ弱い。最近、一色と行動することが増えて知ったことの一つだ。一色は「なんで名前を知ってるの」とばかりに視線を逡巡させてから、愛想笑いを浮かべる。

「どこかで会ったことありましたっけ……」

「まあ生徒会長だしねえ……」

「あ、なるほどです」

一色は即答してから、きゃぴるんとピースサインを目に当てる。いやさすがにそれはあざとすぎるだろ……。

「実は結衣に教えてもらったんだけどね」

「結衣……。あ、結衣先輩ですか？」
「そうだよ。それで話を聞いてるうちに、私も手伝いたいと思って、来ちゃった」
意図せず、漸く話は原点に戻った。
俺は晩翠を瞥見してから、まるですることない笑みを必死に浮かべる。
「来ちゃったじゃないよな？」
「来ちゃった、です」
晩翠は可愛らしく、小首を傾げる。そも俺たち――俺と晩翠は知り合ってから数日しか経過していない。廊下で会えば片手を上げたり、教室で挨拶するとかその程度の仲だ。晩翠がどんなメンタルをしているのか知ったことではないが、対応をしているほどの余裕はないのだ。
「マジで手伝いにきたの？」
「うん！」
晩翠はまるで幼子みたいに元気よく返事する。
その心意気はありがたかった。しかし実際、手伝うと言ったって作業の流れや雰囲気を覚えるのに時間がかかってしまう。あまつさえ足でまといになるかもしれないのだ。
尤も、停滞した会議のおかげで流れなどありはしないが。
「まあ、いいや。人手が多いに越したことはないしな」

晩翠柚奈の考えるところを知りたかったが、会議が始まるまで時間が幾許もない。冷えきった手を擦りながら、提案する。

「とりあえず中入ろうぜ。風邪ひいてこれ以上会議を停滞させたくない」

「ん、そうですね」

「ふー、寒いし、早く入ろっか」

ガラス戸を開くとすぐに、館内の温風が全身に吹き付けた。外に暖気が逃げないように素早く戸を閉める。靴を脱ぎながら、自分の言ったことを反芻する。

これ以上、停滞させたくない――。

実際きっと、全部に向けられた言葉だ。

×　×　×

「それで、前回のブレインストーミングの続きだけど、今日は具体的なスケジュールを決めていこう」

開会劈頭。何一つ決まっていないのに、玉縄はスケジュールを組み始めた。海浜は皆それぞれ、手を上げて、相も変わらずカタカナだとかビジネス用語で名のごとく、嵐を起こす。

今日も今日とて連れてこられた小学生たちは指示された通りクリスマスツリーの飾りを作ったり俺たちのやっている『何か』を興味深そうに見ている子もいれば、退屈そ

うに欠伸をしている子もいた。その中でもどうしても視線が行ってしまう少女――鶴見留美は一人だった。談笑している子たちの輪には入らず、されど会議を見るわけでもない。ただ、黙々と作業を続けていた。俺は離れてしまった視線と脳を『お話』に戻す。

つつがなく会議は踊り、されど進まず。

三十分を過ぎた頃には、総武側は皆、辟易した表情を浮かべていた。一色なんかはそれが顕著で時々舌打ちが聞こえる。副会長や書紀ちゃんも徐々に頭が下がり、このままでは相手に対しての不満が内部で爆発しそうだった。

対照的に海浜側は、恍惚とした表情を浮かべ、しかし、それあるマシンに成り下がった折本には疲れの色が見えた。確かに時間は経過しているようだ。話が進まないから気づかなかった……。

ふと、俺もその存在を忘れかけていた頃、総武サイドから自分の存在をアピールするように大きな声が上がった。離れかけてた意識を必死に戻して、声の主である晩翠に視線を送る。

「はい、質問があります！」

「いいよ、何でも言ってほしい」

取りまとめ役である玉縄が晩翠に発言の許可をする。晩翠は人一倍元気に立ち上

がった。
「なんで会議を進めないんですか？」
「はい？」
ふっと吹き出してしまう。うとうとしていた一色も目をぱっちりあけて、それからこぼれ落ちそうになる笑みを必死に耐えているのが見えた。
うっわあ……、天然怖っ……。
「何か、不満な点があるかな？」
それでも玉縄は笑顔を崩さず、まるでこびり付いたみたいに柔和な笑みを浮かべる。
しかし、晩翠の言葉は確かに響いたようで、総武側とは対比的に海浜サイドは凍りついていたのがその証拠だ。
「だって全然進めないで言葉遊びばっかりしてるから……」
晩翠が申し訳なさそうに言うのが、彼女の人間性を表しているようであって、しかしその悪びれる雰囲気がいっそう真実味を増す。
ちなみに俺たちはもう耐えられそうにない。
大声で、ともすれば演技とも取れるくらいの声で俺と一色は笑い始める。
「あはははは……！」
時には腹を抱え、時には俯いて。そうして俺たちはしばらく笑い続けた。

張りつめた空気の中で突然二人だけが笑い出したのはさぞかし不気味だっただろう。玉縄は俺たちの真意を図りかねてか、ポーカーフェイスを崩す。まあ、真意も何も面白いからですけどね！

とにかくどうやら、玉縄たちは笑いの対象が自分たちだと気づいたらしい。海浜側のどこからともなく、今日は一旦会議を終わらせようと提案された。ひとまずお互い冷静になるためにらしい。

「では、続きはまた明日にしようか」

図らずも、玉縄の全員の話を聞こうとする性質から今日の会議には終止符が打たれた。すると、こちら側の副会長が、耐えかねたのか、「今日も進歩なし」と呟きながら議事録を締めくくる。意図して言ったのかは分からないが、存外その声は小さく、俺たちにしか聞こえなかった。

しかし違うぞ副会長。確かに進歩はあった。

——晩翠の有能さにおいて右に出る者はない。

出会って数日にして、俺の晩翠柚奈に対する評価は随分変わった。

おのずから、晩翠柚奈は一歩踏み出す。

これも彼女の性質なのだとまた一つ笑ってから俺たちと一色は一足先に会議室をあとにした。

19　殊の外、一色いろはは打たれ弱い。

外套を纏い、彼は何度でも元来た道を引き返す。

「終わったあ……終わりましたよ先輩……」
色んな意味で……、と一色は付け足す。
「いや面白かったからいいだろ」
「良くないですよ！」
一色はぷんすか抗議しながら、俺の肩を叩く。すると、少し遅れて晩翠が会議室から出てきた。
彼女は俺たちに気がつくと、駆け寄って来る。
「いやあ……難しいねえ」
殊更その笑顔を強調して、晩翠は呟いた。
え……あれ演技なの……？　なんて動揺している俺をよそに一色が微笑む。
「晩翠先輩？　何であんなことしたんですか？」
「ん？　なんのこと……？」
どうやら一色も俺と同じことを考えたらしい。だが、晩翠は演技とも思えぬくらいごく自然に分からないと主張する。

「まあ、過ぎちまったことは仕方ないしな」
今更いうことでもないだろ、と言外にこめて一色を宥めようと試みる。
「そうだよ！」
晩翠が言うと、「お前が言うな」みたいな目で一色は晩翠を軽く睨めつける。
「てかあの会議の問題点は責任の所在だし」
このままだと責められそうな晩翠を庇うように俺は唐突に本質を切り出した。
「……どういう意味ですか？」
「責任を取るべき、いや取らされる人間がその責任を分担している事だ」
「は？」
「いやだからさあ……、まあ簡単に言うと……難しいな。なんて言えば」
うまく言い表す言葉を探そうと、思索にふけていると晩翠が横から口を挟む。
「誰に責任があるかを明らかにしないから？」
「……例えば？」
一色は不機嫌そうに聞き返す。
「んー、いろはちゃんとか」
「私ですか？」
「うん、私もよくわかんないけど……」

一色に鋭く聞き返されて、晩翠はそう前置きをしてから口を開く。目の前ではぞろぞろ小学生たちが帰り始めていた。お疲れ様です先生……。

「決める時は決める。一番いけないのは優柔不断な態度！　そういうスタンスで行けばいいんじゃないかな？」

晩翠のアドバイスは思いのほか、的確だった。言い方さえ由比ヶ浜みたいだが、本質をついている。俺はそう感じた。

「うう……なったばっかりなのに……」

「まあそれは、確かに」

項垂れる一色に同情する。同時に俺の責任の重さを痛感した。飲み物でも買ってやるか、と自販機の前に立てば、横からひょいと顔が覗く。

「よっ、比企谷」

「なにか用か」

「いや、別にー。いたからさ」

「あっそう……」

折本の対応に困っていると、折本は視線を俺から一色、そして晩翠に移す。当然一色はあからさまに嫌そうな顔をするはずもなく営業スマイル。しかし晩翠は小さく小首を傾げる。

「どうかした？」
「あ、うん……さっき凄かったなあって」
「折本さん、だっけ？　折本さん基本、それあるしか言わないよねー」
「え、あ、それあるかも……」
……折本が圧されてる？　あの折本が？　デリカシーの欠けらも無いし、ボキャブラリーにそれあるしか載ってない折本が……？
俺が驚き、慄いていると晩翠は折本との距離を一歩詰める。そも折本が距離感無視なこともあり二人の間はゼロ距離になった。二人はしばらく見つめ合い、たっぷり時間をとってから二人同時に言葉を被せて、俺の顔を見る。
「君の周り美人ばかりだね」
「比企谷の周り可愛い子多くない？」
「どちらかと言えばおかしな知り合いの方が多いかな」
以前一色に言われたことも交えて即答する。
すると一色がむっと噛み付いてくる。
「まあ、私を除いて変な人ばかりですよね」
「いやいや君、トップ争うレベルだからね？」
とにかく話を逸らそうと、ぱっと晩翠たちを見ると、折本と目が合ってしまった。折

本は目をぱちくり開いてから、俺に問う。
「雪ノ下さん……だっけ？　あの人たちは？」
「あの二人もなかなかですよね、先輩」
ああ、そうだな、と言いかけたが言葉にはならなかった。ただ空回りして開いてしまった口を誤魔化すために、自虐を加える。
「まあ、俺を抜くやつなんて居ないが」
「だよねー！　マジウケるー」
そう言えば折本のマジウケるーなんてアホな言葉も久しぶりに聞いた気がする。どうやらそれあるーに上塗りされていたらしい。それほどまでに中身のない会議を繰り返していることの証左だ。
「まあ、あれだな」
自分が考えていた言葉を口から出して、俺は唐突に話を原点に回帰させる。
「必要なのは意識改革だ。俺は絶対に潰す」
そんな中学二年生の言いそうなことを吐き捨ててから、握った拳の熱が冷めあらぬうちに俺は外套を纏う。
「当然私たちも手伝うよ！」
「まあ……進むなら……」

やけに積極的な晩翠と、消極的ながらも追従する一色。まるでアニメのワンシーンみたいな小芝居を繰り広げていたためか、折本はきょとんとしていた。というか理解したところで海浜への脅迫とも取れるんですけどね……。

とにかくまずば一色に対しての責任を取り、段階的に残りを解決していこう。

誰にいうでもなくそう誓ってから、しかし俺はなにをすればいいのか、まるで迷子の幼子のように、微塵も分からない。

とにかくまずは、一色。

最近揺らぎやすくなってしまった何かが揺るがぬように再度自分に言い聞かせる。

さしあたっては、飽きもせずに同じことを繰り返すだけなんて笑えないお話だが。

彼女は、いつでも少し先を歩いている。

千葉といえばー？　にゃんにゃんにゃーん！　……違うだろー！

「かわいいーっ！」

「あーそっすね……」

晩翠が猫を持ち上げて、撫で回す。それから俺にぐいっと押し付けてくる。

ここは動物園。なんでも、ふれあい館みたいな施設が充実しているらしい。俺は晩翠に連れられて園内の猫カフェに来ていた。

最近はフレンズの影響で来園人数が軒並み上がっているらしい。おかげでどこもかしこも人で溢れていた。君たちはすぐ影響されちゃうフレンズなんだね！

「大きいお友達がいっぱいいるなあ……」

「どういう意味？」

「金には余裕のあるフレンズか……」

「ん？……。まあ余裕があるのはいいよね」

よく分かってもいないくせに、賛同する。とにかく賛成する、どうやらこれがリア充の特性のようだ。猫カフェ中が「あー、かわいいー！」とか「これはミーアキャットっ

て言うんだ――」とか知識人で溢れていた。どうして男はすぐに知識を自慢したがるのでしょうか……。

俺が男の悲しい習性に打ちひしがれていると、隣で晩翠がにっこにっこにーしながら俺の顔を覗き込んでくる。

「私、猫派だよ！」

「あっそう……」

「比企谷くんは？」

「俺は……まあ猫か？　猫飼ってるし」

そう返事をすると、彼女は猫を持ち上げて「にゃんにゃんにゃーん」なんて言いながら俺の膝の上に乗せてくる。ちょっ、ちょっと！　毛がつくからやめて！　「にゃん」が、かっ、可愛いからじゃないんだからねっ！

「しかし猫派なんて意外だな」

赤い頬を隠すように取り繕って言う。

「そう？　文化祭の時に話さなかったっけ」

「文化祭……？」

「あー！　あー！　いや、違う！　人違い！」

記憶になくて、問い返すと晩翠は必死になって手をぶんぶんぶん、頭もぶんぶんぶん、

蜂が飛んでるのかと思うほど振る。俺みたいなクズはなかなかいないと思うわけだけれども、似てるやつがいるのか？　なんて同族の存在可能性に疑問が浮かんで間もなく晩翠は毒を吐く。

「比企谷くん友達少ないし、猫派私くらいなんじゃない？　友達少ないし」

「いや二回言わなくていいから」

「共通点、だね！」

そう言って、彼女はにこぱっと笑う。確かに友達は少ない。だが猫派が周りに居ないわけじゃない。友達ではなくて、知り合い。あるいは、同志もその範囲に入るのなら、いる。尤も、同志だなんて思っているのも一方的だろうが。

それから15分ほど他愛もない話を続ける。猫の可愛さだとか、学校生活、小町や戸塚の可愛さに小町と戸塚の天使っぷり、極めつけは小町と戸塚の素晴らしさについてお話させていただいた。

「そう言えば、今日って私たちが出会って、ちょうど1週間じゃない？」

彼女はケーキを食べようとして、そのフォークをこちらに向けながら唐突に問うてくる。これは小町に叩き込まれたテーブルマナーを……、なんて考えていると彼女はやけに真剣な眼差しを見せた。おかげで視線を逸らせなくなってしまった。

その上、不意で、俺は怯んでしまう。

「そろそろ、本気でどうするの？」
「……」
言葉に詰まってしまう。
たった一週間。されど一週間。そんな短い期間で彼女は表裏一体で迫ってくるのだ。たった一瞬でふざけて答えようなんて雰囲気ではなくなってしまった。
――よく分かってもいないくせに。
しかし言葉にはならない。まるで子どもみたいな本音を飲み込んで、スマホにちらっと視線を落とした。彼女はご機嫌そうに鼻歌を歌いながらケーキを頬張っていた。
……それ結構難しいよね？
「もう3時だ、他もまわろうぜ」
「……そうだね。次、行こっか！」
一度、咀嚼を終えてから、彼女は口を開く。俺はコーヒーの一杯さえ注文しなかったからか、喉がからっからだった。冷えたコップに注がれた水を手に取って、一気に飲んだ。
避けている言葉を突きつけて、けれど正確な距離感を保ち続ける。実際彼女が何を考えているのかすでに分からなくなってしまっていた。
×　×　×

「次、あれ乗ろうよ！」
「って、ここ動物園だからね？」
俺の確認虚しく、彼女はコーヒーカップのアトラクションの方に駆け寄っていく。ある程度動物を見て回ると、彼女はミニ遊園地を見て回りたいと言い出したのだ。園内の端におまけ程度で遊園地的なものがあるのだろうという予想は大いに外れ、なかなかの規模だった。経営者、頭大丈夫かな？　と思う程度には大きい。
晩翠はと言うと、さっさとチケットを買いに行っていた。ちょっと？　そろそろ小町に持たされた数枚の諭吉さんが亡くなられるんですけど？
俺の思いなどつゆ知らず、彼女は満面の笑みを浮かべ、チケットを振り回しながら帰ってくる。何度か転びそうになりながら、１００ｍ程の距離を駆けてくる。俺も少し走って合流する。
「はあっ……はあっ……買ってきたよ！」
「まあお前が今来た道を戻るわけだけどな」
皮肉を言いながら、お金を返そうとポケットから財布を取り出す。すると彼女はちっちと舌を鳴らす。なんかムカつくなこいつ……。
「いいよ、私が乗りたいんだし」
「そういうわけにもいかないだろ」

「いいって！　ほんとに私乗るだけだし」

言いながら、彼女は一枚しかないチケットを見せてくる。って最初から俺のはないのかよ……。

小さくショックを受けていると、晩翠が戻ってきた時よりチケットの枚数が少ないことに気がついた。さっきは3枚くらい持っていたはずだ。

「さっきもっと持ってなかったか？」

尋ねると、あー、なんて言って彼女は手に持っていた薄桃色の財布からチケットを取り出す。そしてそれを高くあげると、にこぱっと大仰な笑みを浮かべた。

「あとで二人でお化け屋敷行こうと思って！」

納得納得納豆食う。彼女は言うが早いか、荷物を全部、俺に預けてコーヒーカップに向かってしまった。「ポケットから飛んでいくと危ない」からしい。……どれだけ回す気だよ。

一人を満喫するためにアイスクリームを買ってから、とりあえず、とベンチに座ると晩翠のスマホに通知が来ていることに気がついた。通知が来ると同時に画面がつくタイプようで、意図せずとも通知内容を見てしまう。

ＦＲＯＭ：比企谷小町

ごみいちゃんはすぐ酔うんで、確かにコーヒーカップとかやめた方がいいかもです

ね。

へ？　小町？　なんで？　とか思ってるうちに通知をタッチしてしまってアプリが起動する。どうやらパスワードをかけていないらしい。彼女の携帯をいじるクズ彼氏みたいな背徳感を覚えながら、二人の関係を探る。しかし、先にみた通知の一個前で止まってしまった。

ＴＯ：比企谷小町

比企谷くん、ジェットコースター弱いのかな？降りたらバレないようにフラフラしてる。

そこで俺は何事も無かったようにアプリを閉じた。どうやらコーヒーカップに一人で乗ったのは気づかいらしい。バレないようにしていたのに、全て見抜かれていたようだ。そのやり口がまるでどこかの誰かを見ている気分で不快だった。

――言ってくれないと分かんねえよ。

そんなことを思ってすぐ、一瞬時が止まった。

そして、俺は決意する。

×　×　×

「ふわあっ、怖かったねえ」

「ああ、まあ……」

コーヒーカップから帰ってきた晩翠に連れられて閉園間際だと言うのにお化け屋敷に入った。

まあそれなりのクオリティで、出口で俺の目がさらに腐る程度には面白かった。俺は孤高の異端児の名を欲しいがままにしているわけだが、中学生のころお化け屋敷に一人で入ろうとしたが知らない人とペアを組まされてあからさまに嫌な顔をされて以来、怖くて行けなかったのだ。だから、久しぶりだった。

取り留めのないお話をしながら夜闇に包まれた宵の街を歩く。ネオンライトに照らされた街をしばらく歩くと彼女の最寄りらしい駅に着いた。彼女はため息をついたかと思えば、どこかで見たような——花火大会の帰りの由比ヶ浜結衣のような表情で、俺を見据える。

「じゃ、また明日学校で」

俺の方から話を切り出して晩翠の返事を待つ。

「あ、うん、また明日！　今日は楽しかった」

「まあ、そうだな息抜きにはなった」

「でたっ捻デレ！」

「広がりすぎだろ……」

呆れたように言ってから、危うく小町と晩翠の関係を聞き出しそうになってぐっと拳

を握る。

「じゃあね、また明日」

「おう」

まるで慈悲深い女神みたいな表情で俺を見てから静かに手を振って駅に向かう。小町の言葉通り駅に入るまで後ろ姿を見届ける。すると途中で振り向いて、彼女は俺にまた手を振ってくる。俺はそれに静かに返してから、駅に止めておいた自転車を取りに行った。

見上げてみればこの時期にしては珍しく、雲一つのない綺麗な空で、満月が煌々と輝いていた。

俺はすぐに自転車に跨って、時期相応のあまりの寒空に帰りを急いだ。

されど彼も彼女も、本物が欲しい。

ぐいっと伸びをして、ソファに横たわる。

晩翠の見送りをしてから気づけば数時間が経過していた。カチリと音を刻む時計の短針は午前零時を回り、生活音は何一つ聞こえない。

静かだから、思索が巡る。

――クリスマスイベントを成功させなければならない理由は一色いろはと鶴見留美のためだ。

そして、このイベントを手伝っている直接的な理由は生徒会選挙の時に俺が一色を会長に推したからだ。その選挙の時に雪ノ下と由比ヶ浜を会長にさせないためだ。ならば、二人を会長にさせたくなかったのはなぜだ。小町に行動の建前まで貰って動いた理由はなんだ。

――欲しいものがあったから。

多分、昔からそれだけが欲しくてそれ以外はいらなくて、それ以外のものを憎んですらいた。だけど一向に手に入らないから、そんなものは存在しないとそう思っていた。

なのに、見えた気がしてしまったから。

触れた気がしてしまったから。
だから俺は間違えた。
まずは平塚先生の言外の激励。
そして、核心的な晩翠柚奈の気遣い。
お礼はきっとする――だから。
だから、今回だけは自己責任にさせてくれ。
×　×　×
さっきから血流がいやに早くて、人気のない廊下の寒々しささえ気にならなかった。
まるで聳え立つような扉の前に立って、一度だけ深呼吸する。そして扉を二、三度叩いた。
「……どうぞ」
扉越しに微かな声が聞こえてきた。
滅茶苦茶に重い扉を開けて中に入れば、ひどく驚いた表情で二人がこちらを見つめていた。
「ヒッキー。どうしたの、ノックなんかして」
由比ヶ浜結衣は普段と同じように携帯を握りしめたまま、きょとんとしていた。
雪ノ下雪乃は読みさしの本に栞を挟むと、そっと机の上に置いた。それから、誰に向

けるでもなく、独り言みたいに小さく呟いた。
「無理して来なくてもいいと言ったじゃない」
「ちょっと用があってな」
お互いに黙り込んだせいで、まるで天使でも通ったかのように沈黙が起こる。
「す、座ったら？」
意を決して言ったような由比ヶ浜に頷きを返して、ゆっくり下座――依頼人の席に座った。
彼女たちは不思議そうに俺を見つめる。
そして俺は重々しく口を開く。
「一つ依頼がしたい」
ああよかった。何度も練習していた言葉は、思ったよりもあっさり出てきてくれた。
話してくれるんだ、というような安心した表情で笑顔を見せてくれる由比ヶ浜。だが雪ノ下の表情はまるで対照的だった。
言葉を飲み込んで口を結びそうになるのを必死にこらえて今の状況を説明した。
一色いろはのこと。
鶴見留美のこと。
そして自分の責任。

話せば話すほど、矛先は俺の意図しない方向へ行ってしまう。
ついには由比ヶ浜と雪ノ下の二人の言い合いが始まりそうだった。
そんなことを言いに来たんじゃない、と言いながらも実際口にしたい言葉さえ見つけることができなくて、二人を宥めることさえ難しかった。
話せば分かる。口に出さないとわからない。そんなものは幻想だ。話したってわからないことは
往々にしてある。口に出さなくったってわかることだって、確かにある。
きっと忖度とか、斟酌とかじゃなくて。
言葉や行動じゃなくて。
結局、俺が言おうとしていたことなんて、どこまでいっても、どんなに考えても思考や論理でしかなくて、計算であって手段であって、策謀でしかない。
――言うだけ無駄なのに。
けれど、俺は言葉が欲しいんじゃない。俺が欲しいものは確かにあった。
それはきっと、分かり合いたいとか、仲良くしたいとか、話したいとか、一緒にいたいとかそういうことじゃない。俺はわかってもらいたいんじゃない。自分が理解されないことは知っているし理解して欲しいとも思わない。
俺はわかりたいのだ。知っていたい。知って安心していたい。安らぎを得ていたい。

わからないことはひどく怖いことだから。完全に理解したいだなんて、ひどく独善的で、独裁的で、傲慢な願いだ。そんな願望を抱いている自分が気持ち悪くて仕方がない。けれど、もしお互いがそう思えるのなら。

「それでも、俺は……」

いつの間にか出ていた声は、自分でも震えているのが分かるくらいだった。

嗚咽が漏れそうになるのを必死にこらえる。そして飲み込みそうになった言葉を吐き出した。

「俺は、本物が欲しい」

すぐ近くにいる彼女たちが霞んで見えた。

×　×　×

「本物が欲しい、だって」

「……なんか、意外ですね」

別に盗み聞きする理由なんてなかったのに、何気なく結衣ちゃんにイベントの現状を伝えに来たら聞き入ってしまった。今日の会議の中止を比企谷くんに伝えに来たいろはちゃんも、すっかり黙り込んでいた。

「私は……そんなに驚かないかなあ」

「なんでですか？」

訝しむような目でいろはちゃんが見てくる。どれだけ冷めた奴だって思われてるの？　比企谷くん……。

「なーいしょ！」

パチリとウインクを決め込む。いろはちゃんが残念な奴を見るような目をしてから、私に何かを言い返そうとした時、突然目の前の扉が開いた。

「ゆきのん！」

結衣ちゃんの叫び声がまず確かに聞こえた。動けずに、走り抜けた雪ノ下さんを目で追っていると比企谷くんたちが部室から出てきた。いろはちゃんは今日が休みだということを必死に伝える。

私は比企谷くんの赤い目を見てすぐに、彼のその真剣さが伝わった。先に出てきた結衣ちゃんは目に涙を湛えていた。

いろはちゃんが雪ノ下さんの行った方向を伝えると比企谷くんたちは少しお礼を言ってから、すぐに走って追いかけた。

「なんか、羨ましいです」

「どうして？」

まるで羨望とは思えない目で、むしろ美しいものに魅せられたようでさえあった。

「あんなに深い関係、ですよ？」

「まあいろはちゃん友達いなさそうだしね」
「いますっ！」
ぷんすか怒って言い返されてから、私は何気なく三人の行った先を見つめていた。
「私は……」
気づけば口から漏れ出ていて、私はぎゅっと唇を結ぶ。けれど、いろはちゃんは聞き逃さなかったみたいで、リピートして問われる。
「私は？」
「……内緒」
自分の頬が熱くなるのが、分かった。いろはちゃんはこの時を待っていたと言わんばかりに、攻め立ててくる。
必死に躱していると、いろはちゃんがぽつりと呟いた。
「私は……本物になれるかな」
「って、わかってんじゃん！」
ぱーん！　といろはちゃんの肩を叩く。けれど全然痛そうにはしなかった。これは筋トレをしなくては……。
そんなことを考えているといろはちゃんは太陽みたいににこぱっと笑ってゆっくり口を開く。

「私も、本物が欲しいです」

笑って返すには、あまりに真剣さがあった。

誰もが、いつだって追い求めている。

「見ているだけでもイライラするわね……」

会議が終わってベンチに腰をかけると、雪ノ下が額に手を当ててため息を漏らす。その姿勢がやけに似合っていて少し笑みを浮かべてしまった。

雪ノ下は俺の気持ち悪い笑みなど気にせず、果たして由比ヶ浜は困ったような表情だった。トレードマークみたいに自信なさげに笑ってからぽつりと少しだけ口を開いた。

「あはは……あれはすごかったね……」

「だいたい初めて見るニューフェイスって何なんですかね。バカなんですか」

遅れてやってきた一色がジュースの缶を片手にぷんすか怒る。なにを言ってもあざとく聞こえるのはなんでしょうね……。まるであいつとは正反対――って今日あいつは？　よく考えたら晩翠がいない。気づかなかった……。

俺は何気なく周りを見渡して、やっと気づいたような振りをした。ついでにあからさまにも「ん？」と声を漏らして、注目を集めた。三人とも不思議そうな表情で俺を見つめる。

「今日、晩翠いないのか？」
ごほんごほんとわかりやすく声を整えてから誰に向けてとも決めず、問うた。すると、由比ヶ浜が、ほへ？　みたいな表情で一瞬呆気に取られたようだった。しかし、それはすぐに戻り、いつもとはまた違う、まるで申し訳なさも混ざっているかのように、あるいは悪びれるように彼女は苦笑いを浮かべた。
「あー、ゆきのんには言ったんだけど……」
そう言って視線をそっと逸らす。あー、これ俺だけ忘れられていたやつですね……。けれど今更気にすることじゃない。慣れているし、何より相手は由比ヶ浜だ。つまるところ、由比ヶ浜なのだから仕方ない、で大方話は通る。
「って私も言われてないです！」
さっきまで壁によりかかって座っていたくせに自分が省かれていたことについて一切の余裕を与えず、自己を主張する。それに、憧れる、というか二人だけ省かれたりした時の結束感は異常。
「ほら、俺ら嫌われてるから」
「は？　先輩なんかと一緒にしないでください」
ぎっと彼女は俺を睨めつける。しかし俺はそれをゆっくり視線を逸らしたり、躱してから晩翠が今日いなかった理由を問うた。

すると、代弁とばかりに雪ノ下が口を開く。
「今日は彼女風邪みたいなの」
はは、と乾いた笑みが漏れる。あいつが、あの晩翠柚奈が、風邪……？　まさか、そんな。
「おい……昔からバカは……」
「ヒッキー失礼すぎ」
由比ヶ浜に窘められて、それきり閉口した。しかし由比ヶ浜と一色にかかれば沈黙など生まれるはずもなく、五分もしたころには、話は解散へと流れていった。俺と雪ノ下もそれに同意して、雪ノ下はベンチから立ち上がり、俺は厚手のコートを羽織り直した。
「じゃあ、また明日」
学校帰りの重たい鞄を肩にかけながら言って、同時に歩き始めた。返事なんて聞く気はなかったが、皆それぞれ挨拶をしてくれる。
「ばいばい、また明日ね、ヒッキー」
「さよならです、先輩」
「あなたが明日まで生きているのなら、また明日会えるかもしれないわね、さようなら」
「はいはいさよなら……てか一人やけに攻撃的なやついるよね？　やめてくんない

？」

わざわざ振り返って言えば、皆ケラケラと楽しそうに笑う。若干一名上品な笑い方だったが。

結局、俺が欲しかったものなんて、今でさえも曖昧模糊で、明白な答えは未だに得られない。

けれど、こういう何気ない挨拶が、皮肉が、戸惑いがきっと、今だけでも欲しかった安らぎなのだと柄にもなく、そんなことを思った。

× × ×

翌日のこと。今日も晩翠は休んだようだった。そも昨日の時点では気づかなかったのだが、改めて思えば、確かに昨日、晩翠はいなかった。

黒板の欠席の欄に貼られた一枚のネームプレートに意識を持っていかれながら一日の授業を終えると、由比ヶ浜が近づいてきた。彼女はどこか不安そうな表情で内容は簡単に察することが出来た。果たして由比ヶ浜は彼女の名前を口にする。

「今日も休みみたいだね、ゆずっち」

「ああ、そうだな」

ぶっきらぼうに返事をしながら席を立つ。コートを取りに行こうとすると、彼女もついてくる。

「それで、今日お見舞いに行くから」
「ああ、そうだな。……は？」
「やっぱり聞いてない！」
由比ヶ浜は頬をぷくーっと膨らませて、大仰にその不満を体で表現する。俺が先を促すように、どんよりした目を合わせると彼女は中途半端になってしまった話の続きを始めた。
「もう、いろはちゃんの許可は取ったから、二人で行くよ！」
言いながら由比ヶ浜はスマホをちょいと操作して地図を見せてくる。どうやら画面中央のバツ印は晩翠柚奈の自宅らしい。けれど、既に知っていると言えるはずもなく、一応知らないふりだけはしておく。
「あいつ、こんなところに住んでるのか」
「そうみたいだねー……」
と、そこで大事なことを思い出した。あまりに自然に聞き流していた。
「ていうかなんで二人なの」
「ホントは私一人で行くつもりだったんだけど……。ゆきのんが……」
またゆきのんかあ……。大方、戦力外通告？　いや、違う！　ゆきのんはそんな事しないからっ！

『比企谷くんに、人間との関わりを持たせてほしいの……、ってお願いされたから……』

由比ヶ浜は雪ノ下の声真似をしながら、至極申し訳なさそうに俺に伝える。一つだけ言いたいことがある。その申し訳そうにしているのが最も人を傷つけることだと自覚を持ってください。

「まあ、じゃあ行くか……」

押してダメなら諦めろ、が俺の座右の銘なのはご存知の通りだ。どうぜ何言っても無駄……。

諦めて鞄を持って教室を出る。少し先で待っていると彼女も慌てて教室を出てきた。それから俺に追いついて、一言だけ呟いた。

「なんで置いてくし……」

心境によって受け取る言葉の重さは違うのだと改めて考え直すことになってしまった。

× × ×

『ごめんヒッキー』

『いや俺もう晩翠家なんですけど』

今日は大寒波が千葉を襲うらしい。そんな日なのに俺は外で待たされて、電話をして

いた。
学校を出て十分ほど、何気ない会話を広げて、由比ヶ浜のコミュニケーション能力の高さに感嘆していると、由比ヶ浜は忘れ物をしたことに気づいたようで鞄の中を漁っていた。
なんか忘れたのか？　と問うと彼女は携帯を忘れてしまったらしかった。しかし晩翠家に行くには名目上、由比ヶ浜の携帯に保存されている地図が必要だった。それゆえ仕方なく、彼女は学校に戻ることを決めた。
俺は自転車を持っていたので、当然貸そうかと提案したが却下された。こんな風が強い日にスカートで自転車は乗れないらしい。まったく当然である。というか寒すぎてスカートじゃなくても、できるだけ乗りたくない。
由比ヶ浜は学校に着いたら画像を送るから、とだけ言って走っていってしまった。
そして、今に至る。
こういう時に限って嫌なことは起こる。そういう俺の予感は往々にして当たるのだ。案の定、晩翠家の戸はゆっくり開いた。
「あれ？　比企谷くん」
「どうも……」
「いやあ不審者かと思ったよ……」

そう言う彼女は明らかに風邪、という格好だった。頭に貼られた冷えピタのようなものと、上下ともにもこもこしたスウェット。その上からパーカーを羽織って、サンダルを履いていた。

「家に誰もいないのか？」

「うん」

「とりあえず、家入ってくれ。悪化したら俺のせいになる」

「当然、比企谷くん入るよね？」

「……入りません」

「じゃあ私も入りません」

「なんでだよ……」

俺が晩翠の行動に当惑していると、スマホの通知音が鳴った。反射的にポケットから取り出すと発信元は由比ヶ浜だった。ロックを解除して通知内容を見た俺は固まってしまった。

『ごめん、今日用事あったの忘れてた！』

由比ヶ浜らしくもなく絵文字さえ使われていないことが緊急性を窺わせる。すると、晩翠が横から覗き見ていたことに気がついた。

「結衣ちゃんと来る気だったんだね」

「ああ」
おかげで由比ヶ浜が来るまで延ばそうと思った作戦も水の泡。……絶対許さないからな……。
「それでどうする？」
熱っぽさが抜けてなくて、今の寒さとは対照的に全身を赤らめている晩翠が俺に尋ねてくる。
ドアノブを握ったままふらふらしているのが見えているし、吐く息が荒いことにも気づいた。
どうするって、選択肢一つしかない……。
「はいはい、わかったよ。ご両親が帰ってくる前には帰るからな」
「うん、ありがと」
人肌寂しかったのかもしれない。少し目が潤んでいた。風邪でメンタルが弱くなっているのか、それとも症状が辛いのか定かではない。けれど、一刻も早く部屋に連れていった方が良いことだけは明白で、俺はお邪魔させてもらうことにした。
「……襲わないでね？」
「誰が襲うか」
蒸気が上がりそうなくらい真っ赤な頬と、あざとい上目遣いに不意に鼓動が早くなっ

たことは、まあ口にする必要は無いだろう。

彼女は、過去も未来も見据えている。

「三十八度か……」

晩翠から体温計を受け取って、読み上げる。体温計には少し温もりが残っていて、図らずも意識してしまう。

俺は雑念を振り払うように体温計を振って、ケースに戻してから立ち上がった。

「飲み物は……、ないな」

ぐるりと室内を見回してみると空のペットボトルがゴミ箱にあるだけで、あとはぽつりと市販の薬が机上に置かれているだけだった。

「さっき飲んじゃった……」

苦しそうに半身だけ起き上がって、焦点の合わない目を俺に向けてくる。それからまた力なくベッドに倒れ込んでしまった。

「あんまり、無理するなよ」

「うん……」

必死に振り絞ったような言葉だけ聞こえて、それきり沈黙が降りた。どうやら晩翠は眠ってしまったらしかった。俺は飲み物と他に風邪に効くものを買いに行こうと思っ

ていたのだが、ともあれ寝てしまったからには仕方ないので、書置きだけ残しておこう。そう思って自分の鞄からノートとシャープペンシルを取り出した。

「これでいいか」

呟いたその声は誰が反応するでもなく、壁に反射して自分に戻ってきた。そのことに一抹の寂しさを覚えながらも、紙を晩翠のベッドのすぐそばにあるサイドテーブルに置いた。

それから取り敢えず戻ってくる気はあるという意思表示として鞄を置いて、足早に踵を返し、自転車に飛び乗った。

……財布、部屋に忘れた。

× × ×

風邪というのは不思議なもので、夜が増せば増すほど元気になってくる。きっと晩翠も例には漏れないはずだ、と期待と不安が混ざった心持ちでドラッグストアを回り買い物を終えた。

午後六時を回るころには、時期相応に辺りはいっそう寒々し、自転車に乗っていて風に晒され続けた手は悴んで赤くなってしまった。

初めて、――正確には教室で会っているわけだが――晩翠と会った公園を通り抜けて、以前受けた晩翠の指示通りに住宅街を走った。

一軒だけ明かりの灯されていない家を見て、それが晩翠家だと確認しながら、同時に御両親は未だ帰らないのだと少し心配してしまった。

一応、インターホンは鳴らす。

鍵は晩翠の鞄についていたものを拝借（窃盗ではない）したので持っているが、常識として。

鳴らしてから一分ほど待ってみたが、まったく反応はなく、物音さえもしなかった。俺は通報される前に、躊躇する暇もなく鍵を回す。カチッという音を聞いてから、遠慮気味にゆっくり戸を開いて、「おじゃまします」と形ばかりの挨拶をしてから晩翠家にお邪魔させていただきました。

二階に駆け上がる。

そして、彼女の部屋の戸をゆっくり開く。

「ふわあ、比企谷くん？」

どうやら晩翠は、俺の足音のせいで起きてしまったらしい。少し罪悪感を覚えながらも買ってきたものを袋から出してサイドテーブルに並べる。先にそのテーブルに置かれていた置き手紙は位置を変えられておらず、読んでいないようだったのでくしゃりと丸めてポケットに入れた。

「飲み物と、あとは冷えピタ……他にはのど飴、念のための薬……マッ缶は俺のだ」

「これっ、え……？　比企谷くんが？」
彼女は目を見開いて、俺の目を真っ直ぐ見つめる。しかしその目は未だ虚ろでどうやら夜に向かって体調が良くなる訳では無いらしい。
「まあな、明日はちゃんと病院行けよ」
「あ……ありがとう」
「まずはなんか口に入れた方が良いだろ、お粥は……作れない……うどんでいいか？」

「ご飯まで、つくってくれるの？」
たまに、ごほごほ咳き込みながら今にも泣きそうな表情で尋ねてくる。
赤くなった目は遠目でも分かるくらいに潤んでいて、時々晩翠は袖で拭った。風邪ひいてる時ってなんか涙出るんだよね……。
「まあ、せっかくうどん買ったし」
「……食べたい」
「ん。じゃあつくってくるから」
こんな時まで一人じゃ寂しいだろ――。こんな忖度に忖度を重ねたような言葉が、気づけば俺の口を勝手に離れていた。
恥ずかしくて、俺はさっさと麺の入った袋を掴んで部屋をあとにした。

×　×　×

「おいしい……」

半身だけ起き上がらせて、サイドテーブルをベッドの上に置いて擬似的に病院のベッドを作りあげる。テーブルの足を晩翠の腰の間に挟んで晩翠が食べやすいように調整した。

「まあ小学生レベルの家事だけどな」

「そうだね、これくらい私もできる」

「それがやってもらったやつの態度か……」

「ごめんごめん、だいたい冗談」

「まあ君なんでもできそうですよね」

皮肉をこめて言って二人で小さく笑みを零す。

晩翠は食べ終わると、ご馳走様でしたと手を合わせてからちょいちょいと俺を手招きする。

「テーブル下ろしてくれる？」

「おう」

食器を落とさないように気を付けながら、テーブルを床に下ろし、元の位置に戻す。食器を片付けようとお盆にのせるとまたしても晩翠がちょいちょいと俺を手招きして

くる。

「なんですか……」

大仰にため息をつきながら、何とも言えぬ表情で俺を呼ぶ晩翠に一歩踏み出す。

その瞬間に足元にあった自分のカバンにつまづいてしまった。その勢いは余ることなく、どこかに掴まろうとした手は行き先を失って蛍光灯の紐を引いてしまった。そのまま、俺は晩翠のベッドに流れ込んだ。

ベッドに座ったままのはずの、彼女の温もりを確かに感じた。

「悪い！　すぐどけるから！」

言いながら体を捻って立ち上がろうとするが、しかしそれは首元にかけられた力のせいでかなうことはなかった。晩翠が俺の首を抱き抱える形になってしまっていた。

「……おい」

晩翠の行動の意味が分からなかった。けれど彼女は風邪をひいている。その事実が彼女の行動を定義づけする上で、俺に最も影響することだけは確かだった。

「緊張してる？」

「しないわけないだろ」

こんな状況でも、いつもの憎たらしい口くらいは聞くことができた。真っ暗で視界が奪われた分聴覚や嗅覚が過敏になって、晩翠の匂いで思考が犯されていくのを実感し

た。

「私は、してるよ」

その声が、やけに耳に刺さった。まるで囁くようで、けれども病人の声とは到底思えなかった。

「そうか、分かったから離して――」

「いつも、お父さんもお母さんも遅くて一人なの。だから、今日くらいは――」

嗚咽とともに途切れた言葉に、続くであろうその言葉の先に彼女の本音が垣間見えた気がした。

晩翠柚奈は天然のようで、実際違う。あるいは、策士である。そんなのが俺の晩翠柚奈に対する評価だった。

何か、言い返そう。どう返事をしよう。

考えているうちに、俺の上半身は完全に晩翠に抱かれ、ふわりとした布団の中へ引き込まれた。

「今日だけだぞ」

まるで諦観したように、言い換えてみれば、諦めたという体で確かに俺はそう呟いた。

×　×　×

あれから少し経って、晩翠は眠ってしまった。電気をつけるのも悪いと思ってスマホ

で時間を確認すれば、短針は八時を回っていた。

それを確認したのと同時に、一階から玄関の戸が閉まる音と「ただいま」という女性の声が聞こえた。間延びして届いたその声は、明らかに晩翠と似ていて、彼女の母親だと容易に予想できた。

何より問題は、二階に登ってくる足音が聞こえることであります。

やっやっべー。っべー。っべーよマジ。

そして、ゆっくり戸は開いた。

誰もがきっと、忘れた頃に思い出す。

ミシミシとゆっくり、けれども確かに近づく足音はパタリと戸の前で一度止んだ。

それから、娘の病状を心配する母親の声がドア越しに聞こえてくる。

「ゆずー、大丈夫ー？」

当然、返事がいくはずもなくその声は部屋にこだましてそのまま消えた。そうして当たり前のごとく戸がノックされた。

「入るよー？　大丈夫ー？」

先よりも声音は心配そうだった。俺は心肺も止まりそうだった。よし、一旦落ち着いて状況を整理しよう。実は大して問題ないかもしれない。

『眠っている女の子の隣に目の死んだ男』

……やっべー、マジヒキタニくんぱねえわ。

俺が思考の整理と状況の整理で、ライフオーガナイズをしているうちにその戸はぎこちない音を立てながらゆっくり開く。そしてぴょこりと顔を出した恐らく晩翠柚奈の母親とご対面しました。

「ど、どうも……」

「あ、あれ？　男の子……？」
困惑を見せる晩翠母。対して俺は日本人の古来より受け継がれてきた最大限の構えを準備する。
まるでスローモーションみたいに完璧な流れだったのにその先は用意に摘まれてしまった。
晩翠母は隠していた口元から手を離し、あざとくもそのしなやかな指の先を鼻につける。
「あ、もしかして比企谷くん？」
「……ご存知で？」
言うなれば、推理したみたいにピタリと当ててから「そっか、そっかあ」なんて連呼し始めた。
「これは失礼をば」
「いや、流行りの言葉使わなくても……」
「いやー、不審者見たような顔しちゃってごめんねー？　目に驚いたわけじゃないからね？」
「目に驚いたんじゃないすか……」
つっこみながらも、寝ている晩翠に一瞥を送ってから俺は所在なさげに絨毯の毛をく

るくると回して一旦心を落ち着けた。
思ったよりやばい状況ではない……。
そう思った瞬間にドッと力が抜けた。こういう時、人は無防備だと思う。例外なく、俺も余計なことを聞いてしまう。
「いつもこれくらいの時間なんですか？」
しまった、と思うも時すでにお寿司。晩翠母は一度考えるような素振りを見せてから、どこか申し訳なさそうな柔和な笑みを浮かべた。
「そうね、そうなの」
「そうですか……」
単純な回答。彼女の母親だ。きっと俺の真意は測りきっているだろう。けれども、同じく単純な応えを返して、それから俺はまた晩翠をちらと見て立ち上がる。
「では夜も遅いのでお暇させていただきます」
どこかで見たような丁寧な挨拶をして、同じく立ち上がった晩翠母に深くお辞儀をする。晩翠母はそれを返すと、戸を開いてくれた。
「今日はありがとうね、看病……してくれたんでしょう？」
「まあ、看病というか……」
言葉に詰まって、斜め下に視線を落とした。強制だとも言えないわけだし、何よりそ

んなことを言うのを自身が拒んでいた。
「お礼がしたかった、ってことで」
「まあ、謙虚」
そう言って、彼女は笑う。その声も、微笑みも晩翠にそっくりで遺伝ってすごいなと、的はずれなことを考えてしまった。
「じゃあ……」
お互いに階段を降りた先で並んで歩く。それから玄関に着くと、俺は一礼をこなした。
「今日はありがとうね」
「いえ、彼女からのお礼を待ってます」
ぶっきらぼうにそんなことを言ってから、またもう一度頭を下げてゆっくり戸を閉めた。
戸から一歩離れて、ポケットの中を手探りで漁って、そして俺は大きくため息を吐き出した。
……自転車の鍵、部屋に忘れた。

だから、きっと彼女は。

「これを君たちにやろう」

ニカッとかっこよい笑みを浮かべながら、奉仕部顧問、平塚静は数枚のディスティニーランドのチケットを俺たちに見せつけた。俺たちが反応に困っていることを察して彼女は言葉を継ぎ足す。

「君たちはクリスマスイベントのなんたるかをわかっていない。うまく行かないのならここでアイデアを貰ってくるといい」

「ホントにいいんですかあ?!」

職員室だというのに、構うこと無く間延びした声を出して、一色いろはは平塚先生から素早くチケットを取った。

一色の手中にあるチケットの枚数を数える。ひー、ふー、みー……。五枚。晩翠を入れてちょうどの数だ。

「私は年間パスポートを持っているし、一枚あまるわね……」

雪ノ下も俺同様枚数を数えていたらしかった。彼女は額に手をやりながらはたと止まる。

「じゃあ葉山くんたち誘おうよ！」
「あっそれいいかもです！」
晩翠がピンと人差し指を立てて、一色が賛同する。それからまたも職員室だというのに話は盛り上がり続け、周囲の先生方の視線に気づくこともなく彼女たちは話し続ける。こうなれば止める者、ましてや反対意見を述べる者などいない。それだけは俺のよく知っていることだった。しかし由比ヶ浜は視線をピタリとこちらに貼り付けて上目遣いに俺を見やる。
「ヒッキーはいいの？」
「……まあ、仕事だし」
面映ゆさを捨てきろうと彼女から視線を外せば年相応には思えない、まるで慈悲深い笑みを浮かべている平塚先生と目が合ってしまった。
彼女が思うところは、言外ながらも程遠く外れているとは思えず、慌てて視線を逸らした。
「平塚先生。ありがとうございます！」
晩翠は純粋な笑顔でそう言って、頭をぺこりと下げた。一色、由比ヶ浜も続いて頭を下げ、形式的ながらも俺も頭を垂れた。それから平塚先生は恥ずかしそうに数回頬をかいてから、一度咳払いして口を開いた。その顔はどこか虚しい。

「なあに、結婚式で当てただけさ」
「へえすごいですね」
おいやめろ。結婚式なんて単語、完璧に地雷だろうが。感心してる場合じゃないぞ由比ヶ浜。
俺の心情を知ってか知らずか、平塚先生はニヒルな笑みを浮かべて俺を一瞥した。
それから反応した由比ヶ浜に視線を移して、平塚先生はきらきらと輝く笑顔を浮かべた。
「ひとりで五回行けるねっ……て」
×　×　×
時計の短針は午前零時を回り、元から少ないご近所さんの生活音もピタリと止まっていた。
由比ヶ浜が地雷を踏んだ後は、俺だけが平塚先生の愚痴三時間コースに付き合わされた。せっかく大好きなりたけに連れていってもらったというのによく味を覚えていない。あまりの惨めさに今日は長引いてしまった、と解散直前の二十一時に謝罪を受け取った。
そして自宅に着いたのは二十三時。あの人は飲酒に飲酒を重ねていたため運転など出来るはずもなく、そういう理由でタクシー代をもらった。けれどもタクシー乗り場に

向かう途中で大魔……陽乃さんに出会ってしまい気づけばペースに乗せられて妹談義に花を咲かせてしまっていた。夜中の極寒の公園だったのに、あまりの熱にコートを脱いだくらいだった。彼女からはお詫びとして、マッ缶を貰ったが、珍しく楽しい話だったので奢ってもらったことに罪悪感が少しばかり残り、帰宅次第冷蔵庫に閉まった。往々にして彼女は人を惹き付ける。そういう点では彼女は人生の先輩であり、尊敬すべき相手なのかな、と深夜テンションに身を任せ、少しずつ印象が変わっていった。

そして、シャワーを浴びて、緊急事態用のマッ缶をぐいっと呷り、ベッドに寝転べば、そんな時間だった。

何がまずいって、明日――まあ厳密に言えば今日がディスティニーランドへ行く日。

集合は八時半に入口前。遅刻厳禁。毎秒ごと腕立て伏せ一回。ちなみに腕立て伏せは三十回が限界。それ即ち三十秒以上の遅れは許されない。

時間を逆算したら遅くても七時までには起きなければ行けない。案外余裕そうに思える？　何言ってんだ。行きたくなくてダラダラする時間が二時間は必要だ。つまり五時までには起きなければいけない。

ただ安心できるのは明日は何も起こらない、と勝手な予想、悪く言えば希望的観測だがそんな予感がしていた。今のところ表面的にだろうがなんだろうが葉山グループには何も問題がない。そして俺たちにも今即刻解決しなければならない問題は無い。唯

一の問題について言及すれば、一色いろはだが、彼女は俺の中では結構クレバーでリスクリターンの計算は完璧、そういう評価だ。

だから、彼女はアクションを起こさない。

そうやって思考の堂々巡りに入りかけたところで、はっと不意に、現実に戻った。目に刺すほど明るい電灯がぱちぱちと消えかかっていた。どうやら変え時らしい。

――まあ考えても仕方ない。寝るか。

そういう楽な方法が、諸手を上げて賛同したいような容易な考えが自分への言い聞かせだなんて思うこともなく、今日の疲れも相まって、俺は早々に深い眠りに落ちていった。

彼女の思惑は、きっと誰も知らない。

「セーフ」

そんな言葉が、おのずから口を離れた。

時間は集合の一分前。どれだけ楽しみにしていたかは知らないが、集まった皆は嬉々とした表情で会話に花を咲かせていた。

メンバーは、奉仕部、晩翠、一色、葉山、戸部……。ちょっと？　いろはちゃん？　なんでとべっちいるのん？

恨みがましく視線を一色に送る。しかし当の一色は葉山へのアピールで俺に構うような余裕はないようだ。ふと視線を感じ、反射的に振り返った。

視線はしっかりと晩翠を捉えた。目が合うと、彼女は微笑んだ。だから、不愛想に口を開く。

「なんだお前か」

「なんだって失礼だなあ……」

そう言って、晩翠は苦笑いを浮かべる。今日の彼女は落ち着いた色のジーンズに、対

照的な白いセーター、そしてダッフルコートで同じ高校生とは思えぬほどシンプルながらも大人っぽい。

きっとモデルみたいな人と交際するんだろうなと思いながらも、なんとも言えない胸やけみたいなものを感じた。だから、すぐにかき消した。

「さっさと入ろうぜ、時間の無駄だ」

「皆、君を待ってたんだけどね」

「ごめんなさい」

早急に敗北を認める。これは自他ともに認める俺の長所であって、アイデンティティだ。

そんなつまらないことを考えていれば、雪ノ下がカツと地面を蹴った。

「ヒキ……ヒキガエル……、いえ、ヒキガヤキンも来たようだし、そろそろ入りましょうか」

いつもこういう場面では消極的な雪ノ下が、普段に対する意趣返しみたいに先陣を切って年間パスポートを掲げた。その表情は俺に対するマウンティングで得た快感と、この先の期待とが混ざっているようだ。先生！　こいつ性格に問題があります！　ていうかパンさんのケースにランドの年間パス入ってるし、こいつどんだけ楽しみにしてたんだよ……。まあ仕方ないか。こいつパンさん大好きフリスキーだしな。

「そうだな」と葉山が一言呟けば、皆ぞろぞろと付き従う。……そりゃあ、やっぱり人間だから、たまに羨ましくなることもあります……。

× × ×

粗方乗り物に乗り終え、閉園も徐々に近づいてきた時間。夕闇に包まれているはずなのに、園内のライトアップで境界線が曖昧模糊なアスファルトは冷え切っている。そんな寒さなど関係ないとばかりにイベントに集まる人たちは、それなりに多い。俺たちもその波に乗って、屹立する城を見渡すことのできるところで立ち止まった。

「あれー、隼人は？」

「ちょ、優美子、あっち見てみようぜ」

騒がしい中だというのに、三浦と戸部の声はよく耳に入った。それをかき消すように、晩翠の吐息が聞こえた。

「ふー、さすがに冷えてきたね」

「まあ、元から寒いけどな」

隣にいて手を擦りあわせる晩翠に目も合わせずポケットに手を突っ込んだ。

「思ったより楽しくて寒いのなんて忘れちゃってたよ！」

ぱっと俺の前に躍り出て、晩翠は笑った。瞬間点灯されていた明かりが消え、花火が打ちあがった。観衆がわっと盛り上がる。色とりどりの花火が打ちあがって、職人さん

の力量に驚いた。
「すごいね、綺麗……」
「そうだな」
「もう、聞く気あるの？」
「まあな」
空を見上げたまま返事をして、あとになって適当な返事をしていたことに気が付いた。表情だけでも確認しておくかなと視界の端で晩翠を捉えた。しかし同時に、打ちあがった花火に驚いて、意思とは関係ないはずなのに思い切り視線は晩翠を向いてしまった。花火の綺麗な光に照らされて、互いに見つめ合う形になった。
「どうかした？」
純粋な笑顔で問いかけられ、答えに窮する。
「い、いやべつに……」
訥々と答え、ひとまずは視線を逸らした。すると晩翠も前に向き直って、それから白くなってしまった吐息とともに、消え入るような声が、確かに耳に入って滞った。
「今度は二人で来たいな」
聞き違いかと思い、横にいる晩翠に向き直ってしまった。しかし見えるのは綺麗な横顔だけで、彼女が二度、同じことを言うことはないと、察してしまった。

俺も体勢を戻した。けれど返事はしなかった。

×　×　×

しばらく無言が続いた後、何気なく見た観客の中に一色と葉山を見つけた。距離は、恐らく５ｍはあるし花火の音で、声なんて聞こえやしない。

けれど、どこかで得た情報が頭の中で繋がる。

正直、合っていたって、外れていたってどっちでもいい。間接的には関係あっても直接はない。ただ、彼女に対してアクションを起こさないなんて勝手な考えを抱いていたことに嫌気がさした。

まるで時が止まったように、寒さで凍りついてしまったかのように一色いろはの時が止まった。

それは確かに遠目からでもわかった。

考えるよりも早く走り出したであろう彼女。それをきっと見届けていた戸部が追いかける。

晩翠にも探すのを手伝ってくれと頼みながらも、俺は葉山の方に向かっていた。どんな時でもキザな奴だ。振り向くことなんてしないし、孤立したみたいに花火を見続けていた。

「なんで振ったんだ？」

率直に、距離感無視で無遠慮に尋ねた。
すると葉山はゆっくり振り向いた。その表情は愁いを帯びていて、心労がよく見えた。まるで寂しさに堪えるような表情で俺に微笑みかける。
「彼女が見ているのはきっと俺じゃない」
「は？」
予想よりもはるかに意味不明で、けれども確かに意味を含んだ言葉に素っ頓狂な声が漏れた。
「まあいいんだ。それよりいろはを探してもらえないかな？　生憎俺は力不足だろうから」
「それなら戸部が捜してる」
「そうか」
――いつでも、葉山隼人は一歩引いている。
そんな印象が浮かんだ。しかし、およそ間違いではない気がする。こいつは自分のパーソナルスペースには誰にも踏み入らせない。それが過去に何かあったからなのかとか、未来になにも起こさないためになのかとか、そういうことは一切として明かさない。だから俺は葉山が嫌いだ。
どこかの誰かの姉のように周りを手玉に取る。自分の手中は見せやしないくせに。

ただ、葉山はそれを拒む節がある。それ故に本質を掴めない。

「じゃあ、俺は先に帰るから」

反応した時にはすでに踵を返していて、こちらにも留める気はさらさらなく「おう」と一言だけ呟いて、先を譲った。

× × ×

ピークを避けた車内は閑散としていて、モノレールの浮遊感に煽られながら、俺と一色だけが車内に残っていた。晩翠たちは、雪ノ下の家に泊まっていくということで最初から話がついていたらしい。心配そうに前駅で降りていった。

「だめでしたね」

「分かってただろ、だめだって」

「だって今しかなかったから」

一色がグイッと寄ってきて、思わず体を逸らす。二人だけの車両はモノレールの鳴らす駆動音しか聞こえない。一色に聞こえるんじゃないか、と思うほど、心臓が音を上げ、鼓動はばくばくときれそうなくらいに脈を打ち始めた。

「なんで」

振り絞って、未だに目の赤い彼女に問うた。

彼女はその綺麗で大きな意志の籠った目をぱちりと開く。そして亜麻色の髪を揺ら

しながら、さっきまでの悲しそうな表情が演技に思えるほどにこりと笑みを浮かべて、けれども慈悲深い女神のように微笑みは絶やさなかった。

「私も、本物が欲しくなったんです」

「聞いてたのかよ……」

俺の悲痛な声が車内にこだまして、消えた。

切り離された外界の光は、街のネオンだった。

彼は進み、彼女は停滞する。

久しぶりな気がする。そう思うほどに前回の会議から間が開いていた。しかし特別心持ちが変わるわけでもなく、コミュニティセンターまで向かう道のりは鉛のように重たい靴で歩いた。

この寒さだというのに、やはり晩翠は先にいて玄関で待っていた。ときどき、同じタイミングで学校を出ればいいと思うのだが、彼女は待っているのが好きだと言う。その強情さが俺にはよく分からないが、結衣ちゃんにも少し分けてほしい。

格好よくポケットに片手を入れたまま、彼女はこちらに手を振る。よく見れば、遊園地に行った時のダッフルコートで、お気に入りのようだ。

「よっ！」

「おう、今日は由比ヶ浜たちの方が先か？」

「そうだね、５分くらい前に来たよ」

「なんでお前は外で待ってんの、また風邪ひくだろ」

言いながら、俺はくいっと顎を館内に向ける。彼女は「そうだね」と言いながらそそくさと館内に入った。

自販機の横を通って、会議室に向かう。
中は既に活気と言うか、海浜側の覇気に溢れていた。いい加減嫌気がさしてきて笑ってしまう。
「どうかした？」
不思議そうに晩翠が俺の顔を覗き込んでくる。
「いや、別に……相変わらずだなって」
「ああ……確かにね……」
声のトーンが徐々に落ちていった。彼女の視線の先はもちろん玉縄率いる海浜高校。お互い顔を見合わせて、また一つため息を吐く。
しかし、いつまでもそうしているわけにもいかないので、指定席みたいになってしまった席に座る。俺たちの到着をもって、人数がそろった。
「じゃあ、始めようか」
玉縄が轆轤を回しながら、全体に一声かける。
分かってるよ。次の言葉は、昨日のブレストの続きから始めようか、だな。
×　×　×
実は俺たちには作戦があった。前日のうちに奉仕部に集まって話し合ったのだ。そうです、皆さん大嫌いな対立をけしかけました。

作戦は完璧……、そんなわけがない。この世に完璧なものなど存在しないのだ。全てがどこかで欠ける。だから、ただ発破になればいい。

先にこちら側から出した提案は悉く蹴られ、海浜側によって、話はどうしても全面協力に向かい始めていた。先にはきっと滞りしかない。

それ故に俺は、提案をかける。いや、正確に言えば対立を仕掛けるのだ。

「それって合同でやる必要あるか？」

明らかにとげとげしい声。言い切ってみれば一瞬のうちに視線が俺に集まった。玉縄も手の動きを止めて、こっちに振り返る。

「それは、合同でやることでグループシナジーを生んで、大きなイベントを」

「シナジーなんてどこにもないし、このままだとたしたこともできないだろ。なのに、なんでまだ形にこだわるんだ」

気付けば、俺は責めるように詰問していた。相手側からは俺を責めるようにひそひそと声が上がり、玉縄も動揺を見せながらも、取り繕おうとした。早口でまくし立ててくる。

「企画意図とずれてるし。それにコンセンサスは取れてたし、グランドデザインの共有もできていたわけで……」

自分の正しさを、皆で決めたことの尊さを主張するような玉縄を、俺はじっと見つめ

る。そして口の端を歪めた。

「……違うな。自分はできると思って、思い上がってたんだよ。間違えても認められなかったんだ。自分の失敗を誤魔化したかったんだろ。そのために、策を弄した、言葉を弄した、言質を取って安心しようとした。まちがえた時、誰かのせいにできたら楽だからな」

俺のその声には、どこか自嘲が混ざっていた。

否定のない優しい空間は甘美だろう。上滑りした議論は議事録に残され、会議の体を残し続ける。そうすれば自分を騙していることができる。

だが、それは偽物だ。

晩翠にやっと気づかされた俺が言えることでもないけれど。

しかし、ざわっと一度起こった声は波立って、反響していく。そして一人ずつ声を上げ始めた。

「そういうことじゃなくてさー、コミュニケーション不足なだけだと思うんだよね」

「一度クールダウンの期間を置くとかしてもう一度落ち着いて話し合いを重ねてさ……」

批判はさせない。融和させる。そんな考えが彼らの態度だ。あくまでもそれは変わらない。

しかし、それを破る声がある。
「ごっこ遊びがしたければ、余所でやってもらえるかしら」
決して大きな声ではなかったのに、そのたった一言で、その場がしんと静まり返った。
「さっきから随分と中身のないことばかり言っているけれど、覚えたての言葉を使って議論の真似をするお仕事ごっこがそんなに楽しい？」
口を開くのは雪ノ下雪乃ただ一人。
「あいまいな言葉で話をした気になって、分かった気になって、何一つ行動を起こさない。損案お前に進むわけがないわ。何も生み出さない、何も得られない、何も与えない。……ただの偽物」
ふと横を見ると、雪ノ下はきゅっと拳を握り、俯いている。だが、顔を上げると凛とした表情に強いまなざしで前を向いた。
「これ以上、私たちの時間を奪わないでもらえるかしら」
会議室からは音が消え、堂々巡りの議論に、空白域が生まれていた。しかしそこにすぐさま由比ヶ浜のフォローが入り、一色も賛同して、空気は最悪なままながらも海浜の妥協点を引出し一旦会議は終わった。
ただ、一瞥した際の晩翠の真剣な表情が頭から離れなくなってしまった。
× × ×

会議が終わったときの空気は最悪だった。比企谷くんの反論から始まり、雪ノ下さんの物怖じしない言葉。分かっていたのに、分かっていたはずなのに、しみじみと三人の関係の深さを感じてしまった。

べつに、以心伝心でも、相思相愛でもない。なのに、確かな信頼関係が、過ちからの進展が確かに三人にはある。

実際、そんなことは前から知っていた。けれども目の当たりにしてみれば、疎外感はやっぱりあった。

でも、その関係を壊したくない。壊せない。

だから、必死にもがいて、追いつきたい。追いつけば、対等な地位に行けばきっと同じに見てもらうことができる。

会議室を出て自販機で飲み物を買うまで、そんな短い時間に私は、ただ延々と考え続けた。

彼も彼女も疑わしい

賢者の贈り物。

誰もが一度は聞いたことがあるであろうそのお話を劇で演じることに決まっていた。

主演は留美。

ナレーションで物語が進む展開のこのお話にはそれほど覚えなくてはいけないことが多くなく、既に時間がほとんどない俺たちにとってそれは名案だった。当然、提案者は雪ノ下だ。反対意見を出す（出せる）者はなく、満場一致で決まった。

海浜側どころか総武サイドまで動けなくしちゃうゆきのん怖すぎ……。

練習を重ねること一週間。毎日召集される小学生たちは文句ひとつ言わず、留美を含めたコミュニティを築き始めていた。留美の笑顔もだんだん増えて、確かに成功に近づいていた。

いよいよ本番は明日。最初はうまくいかないと思っていたことが終わりに近づくにつれ、どこか感慨深いものを感じ始めた。なるほどこれが社畜への順調な道か……。

ふと時計を見れば、既に終わりの時間が近づいていた。今日、小学生たちは一度リハーサルをしてから、明日のために早めに帰らされた。だから、会議室に残っているの

は高校生組だけだ。
その高校生組の方も、どうやら終わりのようだ。玉縄が近づいてきてぱんぱんと手を叩いた。
「はいじゃあ、今日はおしまい！　みんな今日までありがとう。いよいよ本番は明日。手を抜かず、真剣に取り組もう！」
「おう！」と大きな声が上がる。それは別に海浜側だけではない。総武サイドからもしっかり声は上がっている。晩翠なんて、何か知らないけど一番元気だ。頭おかしくなった説まである。と、一人晩翠を馬鹿にしているとちょうど手を下した晩翠と目が合った。
「どうかした？　比企谷くん」
眩しいほどの微笑みで見つめられ、思わず目を逸らしてしまった。
「なんでもねえよ」
吐き捨てるように言って、椅子に体を預ける。
いよいよ明日か。実感がない。
ふう、とため息をついてちらと飲み物を片手に談笑している一色にちらと視線を送る。彼女は身振り手振りをおおげさにしながら、周りの男子を手玉に取っている様子だった。

飼育員か、お前は……。いったい何匹目なんですかね……。そういえば中学にも居たなあ。一色と違ってあざといわけではないが、めっちゃモテるやつ。あの明るい性格と分け隔てなく人に接する感じにやられて告っちまったんだろうなあ。はい、お察しの通り、折本です。

ふと、晩翠と目が合った。いや正確に言えば、視線を感じて振り返った先に晩翠がいた。

「どうかしたか?」

ついさっき言われたような言葉を送ってみた。しかし、彼女に反応はない。ぼーっと俺を一点見つめて動かない。目に気力は感じられない。その上、全身に力が入っていないようだ。実はさっきのは空元気だったんじゃ……。考えるほどに、疑念に疑念が渦巻く。

「お、おい、晩翠、大丈夫か?」

しばらくして、壁に寄りかかり始めた彼女にゆっくり近づいた。彼女はそのまま膝から崩れ落ちていきそうだった。よく手入れされた短めの髪垂らしながら俯き始めた。

「おいマジで大丈夫か?」

下から顔色を覗き見る。するとようやく、彼女の反応があった。今にも崩れ落ちそうな姿勢で、彼女は一言だけ呟いた。

「眠いんです」
「は？」
反応する間もなく、彼女はそのまま俺に寄りかかって倒れてきた。俺は必死に受け止める。
不意に、晩翠越しに一色と目が合った。
一色があざとくぴょこぴょこ近づいてくる。一色と直前まで話していただろう男子たちの視線も一緒にこちらに向いた。
「ちょっと先輩方なにやってるんですか？」
一色はにこにこ笑顔を俺に向ける。一色ほどの美少女になると、目が笑ってなくても笑顔はかわい……、うわ、こわ……。
「なんか晩翠体調悪そうなんだよ」
「え、そうなんですか？」
一色が俺越しに、晩翠の表情を見る。
「……寝てるんですか？」
「いや、確定はできないが、まあ可能性的には高い」
「なるほど、晩翠先輩の眠気を利用して抱きついたと……」
これは軍法会議に欠ける必要がありますね、とか意味不明なことを呟きながら、一色

は俺の顔を見る。言外に、どうするのかを問われているような気分になった。
とりあえず、俺自ら抱き着いた説は否定しておこう……。これだけはね？
「俺から抱き着いたわけじゃ……」
「抱き着いているわけではなく、あくまで晩翠さんが体調不良で寄りかかってきたと、あなたはそう主張するのね？　変態谷くん」
この人を蔑むことに愉悦を覚え、全ての人間を見下しているような声のやつは……。首だけで振り返ると、そこには絶壁ノ下と由比ヶ浜がいた。大方、もう帰るところだったのだろう。鞄さえ持っていなかったが、二人はすでに外套に身を包みんでいた。
「ヒッキーさいてーっ」
少し頬を赤らめた結衣ちゃん可愛い……。なんて考えている場合ではなかった。睡眠不足にしろ、体調不良にしろ、いつまでも寄り掛かった状態で立たせているわけにはいかない。とりあえず寝かせてあげたい。
「マジで急に倒れこんできたんだって……。とりあえず移動させたいんだが……」
「うーん、ここからゆずっちの家遠いよねー」
「ああ、確かに。それなら雪ノ下の家の方が近いな」
「そうね、それなら私の家でも大丈夫よ」
「え、でも晩翠先輩のお母さんとかに送迎に来てもらった方が良いんじゃないんです

か？」
「あ、今日ってすいよーじゃん？　すいよーはパパもママもいないんだって」
「そうなんですか、でもどうします？　雪ノ下先輩の家に運ぶにしても、どうすれば……」
「んなもん台車でいいだろ、晩翠だし。晩翠だし」
「あなたはどこまで最低なのかしら」
「ヒッキー相変わらずさいてーだね」
「せんぱい……」
「いや冗談だから……」
一旦、俺のコートを枕にして床に寝かせたが、いつまでもこうしておくわけにもいかない。俺は精一杯の力を込めて晩翠を持ち上げた。周りの女子のごみでも見るような視線が集まった。
「ヒッキー、それお姫様――」
「みなまで言うな……」
ひとまず俺は、晩翠をコミュニティセンターの入り口のベンチまで運んでいく。
「先輩、まさか雪ノ下先輩の家まで運ぶんですか？」
一色が横をならんで歩きながら尋ねてくる。俺は皮肉をこめてにやける。

「まさか、途中から自転車で台車引いていく」
ちらと雪ノ下を見ると、少し眉を顰めていた。
「……まあ仕方ないわね」
すると、雪ノ下はスマホを取り出してどこかに電話をかける。電話中、一切表情が変わらないのが、少し面白かった。
「頼んだわ。都築さんに」
「お、わりーな」
「最初から狙っていたのでしょう。ちらちら私を見てたじゃない」
「ま、晩翠のためってことで免責でよろしく」
俺はまたにやける。
すると、雪ノ下はまた眉を顰めた。
「それ、ニヒルな笑みのつもりなのかしら？」
死にたくなって、俺は視線を彷徨わせた。